

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成26年2月号

平成二十六年二月一日発行 第二十四卷第二号 通巻第二七二号 (毎月一回一日発行)  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 団栗

高橋将夫

団栗に大樹が託す命かな  
空つぽの大甕満たす虫の声  
桐一葉そつと心に受け止むる  
星雲を凝縮したる露の玉

肌にふれ霧は夜露となりにけり  
胎蔵の露の一滴如意宝珠  
敗軍の将も華やか菊人形  
母の手を払ひバツタを追ふ子かな  
西瓜ほど掴みどころの無い男  
空間も時間も伸びる花野かな  
満月を湖心に宿す鳩の海

槐二十周年大会

# 槐安集

水野恒彦

縞馬の黒の曼陀羅冬めくと  
大冬木人ごゑ幹に沁み入りて  
初氷遠くの音が聞こえる日  
存へてこの世の外の冬の蝶  
凍瀧とならむとしつつ音のして

加藤みき

あらたまの年のひかりの涸山水  
白朮火を人と分かちてあたりけり  
暗がりに獣の目と初灯  
空壕の真ん中に群れ枯尾花  
冬の日やチリペッパーの利きすぎて



中島陽華

ウクレレのことばきらきら秋彼岸  
爽涼の頭を愛しめり空の青  
秋の山さては花魁大首絵  
夕茜小鯊は鯤の貌をして  
喜多の待つ楽土はるかに弥次の秋

竹内悦子

点滴の玻璃の向かうの雁の列  
二階より声のありけり金木屋  
竹竿をばらし糶田広がりぬ  
銭湯の天狗の顔も冬立てり  
手土産は鮫鱈にして専とく女めかな

雨村敏子

顔伸廣額一様ひとつ見えぬかみくろ上座大花野  
獅子柚子の臍のひとつが和紙の上  
みちのくに一番星や日の出鱈  
榎植の実ピカソの顔が三つある  
塔あらしぎを越えかりがねの夜となりぬ

近藤喜子

微笑みて冬ざれを来る修道尼  
幻の見ゆ冬の蝶なればこそ  
良き夢を見るかも八重の返り花  
引つ込みのつかぬ時あり冬の蜂  
木枯や澄むしかなくて星の空

本多俊子

翔べるものみな妖精や大花野  
蒼空に一片の雲神迎へ  
鴉二羽似合ふ景なり冬夕焼  
冬空に一帆生みぬ近江の海  
紅葉の緋わが心音をたしかめぬ

瀬川公馨

リスタートの白露きざむ砂時計  
一山の返り花吹けひとよぎり一節切  
築山の肝の科白は冬入日  
さあさあさあ冬の舞台ぞ太郎冠者  
孔子さまあと西鶴ばりの冬花火

久保東海司

息入れて折鶴翔たす天高し  
全山を紅葉にせよと神に希う  
百僧の一揆の如き煤拂ひ  
おさげ髪梳きて花野へ数へ唄  
富士仰ぐ喉元よぎる蝶ひとつ

中野京子

茶が咲いて明日の自分と昨の吾  
幻想は生きる力よ万年青の実  
万物の染められてゆく風の色  
追善の余韻時雨の展墓かな  
恐竜恐竜博物館と向き合ふ命はずみ玉

柳川 晋

おでん祝上梓出汁よく浸みてゐる如意宝珠  
叩かれて故郷笑ふ亥の子の日  
雪女に聞いてはならぬ熱き過去  
孤高とは人目につかぬ桐一葉  
根拠なき自信鬼火として遺す

岩下芳子

雲若し大和國原柿紅葉  
柿簾伊吹の風を纏ひけり  
如意祝「如意宝珠」祝賀鯨臯馳せ来たる  
冬銀河へ道まつすぐに繋がりぬ  
凧や屋根に踏んばる鍾馗さん

近藤紀子

冬もみぢ赤き鬼ゐる山科絵  
秋霖の後の日差しを愛しめり  
柿たわわ峠の先のわたつうみ  
あらためて刈田の広さ見てをりぬ  
からつぼの犬の寢床に冬日さす



# 槐市集

中 貞 子

山茶花の白に紅さす夜明けかな  
干蒲団を赤子のごとく抱へたり  
来し方や手植の紅葉古りにける  
梟や夕餉樂しく始まりぬ  
柚子風呂のぼこぼこつらうつらかな

中 島 昌 子

つんつんと天差すここな葱畑  
百合鷗水面明るくなりにつけり  
金閣寺の鳳凰翔べり深雪晴  
寒鴉 古都の名刹睥睨す  
貫乳やだんだん熱爛泌みてくる

中 田 禎 子

法話聞く制服の列初紅葉  
小六月地上に降りし飛天かな  
回廊を抜け西塔と翳雲  
槐縁者みな天狼星てんろうせいに見見ゆころ  
如意宝珠の光あまねし初鯨

中 谷 富 子

竜の玉煌く一句出来上る  
半生を枚方に住み菊人形  
饒舌の祖母のかしづく七五三  
落葉掃く手頃になりし竹箒  
银杏散る小学校の大時計



中堀倫子

縦横に秋のつる草不定形  
秋蒔の土に応へる青菜かな  
晩秋や片目のライト走り過ぐ  
秋分や左右にゆるる深夜バス  
朝露に草穂が光るたんぼ道

中道愛子

鰐口を叩いてゐたり神の留守  
顔見世やはねて老舗の鯨そば  
湯豆腐を好みし母も夫もなく  
はやばやと鴨の一陣来てゐたり  
茶室にて開け閉てしたる白障子

橋本順子

如意棒の一振り木の葉飛び散れり  
青き葉のつきたる柚子を貰ひたり  
冬麗や歩幅大きくなりにける  
寒夕焼屋上で吹くトランペット  
あたたかや撫でたき木仏ありにける

前田美恵子

極月のダイエット表出来上る  
訃報あり深くシヨールに身を包む  
伝統を守り続ける冬仕度  
手の中に包んでゐたる榎櫃の実  
すぐそばに茶の香立ちたる冬座敷

松下八重美

冬霧やワイン発祥地にゐたり  
熱爛や笑ひ上戸と泣き上戸  
冬うらら茶壺の形のポストあり  
草の上に腰を下ろしたり川千鳥  
花八手籠編む竹のゆらゆらす

柳橋繁子

冬の雨千の棚田のひろがりに  
まどろみの中に落ちたる冬の雷  
子を思ふ寒き朝の赤き靴  
冬眠の蛇よろよると鍬光る  
しがらきの陶の狸や石路の花

# 槐集

## 高橋将夫選

秋思とはかるく俯く半跏像 大阪 江島 照美

待たす身と待つ身の間秋時雨

時流れ色変へぬ松そこにあり

薄紅葉美男におはす八尾地藏

点描のマジックありと山粧ふ

行く秋や鯉は落暉を呑みにける 枚方 熊川 暁子

うれしくてならぬ鈴の音七五三

歪むほど必死に廻る木の実独楽

ななかまど闇の深さを燃えすすむ

串柿の人並みと言ふ横ならび

翁忌や谷の底まで冬紅葉 岡崎 犬塚李里子

諦めの果の明るさ冬の虹

冬の鴟責めず比べず生きたしと

冬オリオン犬の水飲む音のみぞ

冬帝のひかりに脅ゆアルマジロ

明るさに海鼠の唄ふ夜のあり 大阪 有松洋子

心にも浮力ありけり冬北斗

冬はじめ白樺林発光す

冬の蝶日向の岩に溶けてゆく

冬夕焼いのちの色と思ふなり

白障子閉めるや夜叉になりける 喜屋川 前田美恵子

法灯の揺れのおさまり冬に入る

小春日や母の手慣れし糸通し

獵銃の響き林の膨らみて

百薬の長扱み交はすちやんちやんこ

歳ごとに旨み増すもの蕪汁 山根 征子

如意宝珠生かされてこそ冬句会

大方は句会のメモや古暦

伏す吾を旅に誘うか冬帽子

言の葉のまことしやかに冬隣

# 銀河往来 高橋将夫

点描のマジックありと山粧ふ 江島 照美

紅葉山は赤、黄、緑とまるで点描画を見るようである。自然がなすマジックと言われると、まさにその通りと思う。

〈時流れ色変へぬ松ぞこにあり〉は作者の精神の位相が窺える一句。きつと確かな心の置き所があるのだろう。

〈愁思とはかるく俯く半脚像〉の句は広隆寺の弥勒菩薩を思わせるが、なるほど、半脚思惟像の思惟は愁思だったのか。

〈待たす身と待つ身の間秋時雨〉では、秋時雨がままならぬ恋の道を想起させるが、私にしてみれば、もはや遠い昔のこと。〈薄紅葉美男におはす八尾地藏〉は素朴でほほえましい。

串柿の人並みと言ふ横ならび 熊川 暁子

横並びに柿が串に刺された串柿をみて、「人並み」を連想するあたりが作者ならではの感性。「団栗の背比べ」のように、人の世を自然の中に見ている。

〈行く秋や鯉は落暉を呑みにける〉は鯉の口に呑み込まれる落暉がダイナミックだし、〈うれしくてならぬ鈴の音七五三〉では、うれしくてはしゃぐ子供の様子が鈴の音からよく伝わってくる。

〈歪むほど必至に廻る木の実独楽〉〈ななかまど闇の深さを燃えずすむ〉にも、それぞれ作者ならではの着眼がある。

諦めの果の明るさ冬の虹

大塚李里子

諦めてしまえば、心は冬の虹のように澄み渡る。人間あきらめが肝心といったところか。

〈冬の鴟責め比べず生きたしと〉では、人を責めず、人と比較しないで生きたいという。冬に入ってもまだ猛々しく鳴く鴟をみると、そんな気にもなるう。〈翁忌や谷の底まで冬紅葉〉では、作者の心の底を見る思いがする。

明るさに海鼠の唄ふ夜のあり

有松 洋子

夜なのに海鼠の周りがほんのりと明るく、そんな中で海鼠が唄っているという不思議な景。海鼠は本人で、闇でも明るい心境なのだろうと思う。

〈心にも浮力ありけり冬北斗〉の「心の浮力」、〈冬はじめ白樺林発光す〉の「白樺林の発光」、〈冬の蝶日向の岩に溶けてゆく〉の「岩に溶けてゆく冬の蝶」、〈冬夕焼いのちの色と思ふなり〉の「いのちの色」はいかにも作者らしい感性。

猟銃の響き林の膨らみて

前田美恵子

銃声が周囲に広がってゆく感覚を「猟銃の響きで林が膨らむ」の措辞が見事に捉えている。鳥が一斉に飛び立つ様子まで目に浮かんできそうである。

〈白障子閉めるや夜叉になりける〉は怪しげなようで、艶っぽいようで、やっぱり怖い話。(以下略)